新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。本年 2026 年の夏の理事会で理事長の任期終了となります。現理事会の体制の最終年となりますが、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2025 年は初の女性首相の誕生、街中でのクマ被害、米騒動、大谷翔平や山本由伸をはじめとした日本人メジャーリガーの活躍など多くの話題がありましたが、我々にとっての大きな話題と言えば、大阪国際万博の開催とそのときに大阪で行われた CVIT2025 学術集会でしょう。大変な盛り上がりをみせて、どちらも大阪のあるいは CVIT の勢いの良さ、元気さを感じさせてくれる素晴らしいものでした。また、大阪万博は約 2900 万人、CVIT2025 は約 6300 人と期待を上回る参加者数で、2025 年の夏を盛り上げてくれました。大会長の志手淳也先生、またオール関西でたくさんの素晴らしい企画をたてていただいた先生方、まことにありがとうございました。本年の小林欣夫会長の CVIT2026 もすでに勢いの良い企画、ポスターが公表されており、大変期待しています。皆様も盛り上げをよろしくお願い致します。

CVIT の新規正会員は毎年 500 人以上の入会があり、メディカルスタッフ会員も 500 人程度の入会があり、合計会員数は 13500 人を超え、循環器領域でも最も勢いのある学会の一つと言えると思います。しかし循環器内科に進む若手の減少はこの 3 年間顕著になってきており、その循環器内科に進んだ医師が入ってくるこの CVIT 領域への影響はこれからと言えるでしょう。内科全体ではかつてないほどの専攻医増加となっているなかで、循環器内科志望のみが急減少しております。CVIT の理事で日本循環器学会の代表理事である小林欣夫先生と協同して、厚生労働省やマスメディアへの働きかけを継続しており、行政、政治家、マスコミも問題点はよく把握して理解しているものの、医師の選択の自由に関する人権問題や日本人の価値観などが障壁となり、実際には十分な対策ができていない状態です。CVIT では今後も日本循環器学会と一緒にマスメディアや行政への働きかけをさらに強めていき、できることから実現していく所存です。タスク・シフト/シェアの問題も高橋佐枝子理事を中心に議論が進んでおり、カテ室での多職種の関わりを重視していきたいと思います。

2025 年の CVIT 誌のインパクトファクターは 5.8 と素晴らしい値となり、循環器系のなかでも一流雑誌の仲間入りができました。特に優れたレビュー論文、コンセンサスドキュメントをタイムリーにご執筆頂いた先生方、編集長の小林欣夫先生、associate editor の先生方、査読を引き受けてくださった先生方のご努力に深謝いたします。

J-PCI、J-EVT、J-SHD レジストリーからの一流学術誌への論文投稿がさらに増えています。レジストリー事業は業界の健全性と CVIT の存在価値を維持する根幹です。入力の手間が大変なことと思いますが、タスク・シフトやデータベースソフトとの連携などを利用して、入力がルーチン化できる体制整備をよろしくお願い申し上げます。このレジストリーをさらに活用し、認可取得後に必要となる市販後調査やクオリティインディケーターのデータ収集、教育普及事業などさまざまな展開を検討中です。循環器のニューデバイスの安全かつ迅速な導入、速やかな適応拡大、わが国からのデータ・論文の創出等大きな役割をはたしております。

適正使用指針検討小委員会を設置してエキスパートがデバイスの適正使用指針を作成する仕組みがうまく働くようになり、添付文書での規制をできるだけ減らし、CVIT が主学会と

して承認前から行政とともに市販後のデータ収集を企画し、その結果を用いて適正使用指針の改訂で適応拡大をはかっていくモデルが確立し、インターベンションデバイスの導入、臨床に即した承認が実現できてきております。適正な手技料の設定、デバイス価格の維持によって学会・教育活動が維持できるような働きかけが課題と考えております。

多くの委員会の委員長、委員を務めていただいている理事、代議員、会員の皆様の頑張り、膨大な業務を効率よくこなしている事務局の力で CVIT の影響力は各方面でとても大きくなっております。皆様のご支援にあらためて感謝申し上げたいと思います。

心血管カテーテルインターベンション領域がますます発展できるよう活動していく所存ですので、引き続き何卒ご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。昨年の活動実績、今年の活動の重点項目の一部を報告させていただきます。

活動報告と今後の活動方針

1，CVIT 会員は 2025 年 12 月 18 日現在、医師会員数 9,052 名、メディカルスタッフ会員 4,456 名、合計会員数　13,508 名を数え、日本循環器連合のなかでも最大規模のサブスペシャリティ学会となっていますが、日本循環器学会と同様に、若手医師の入会の減少が問題となってきております。

2，CVIT 誌がインパクトファクター5.8 を獲得しました。特に他の学術誌に投稿する際は、ホームページにあります consensus document や review paper の引用をよろしくお願い致します。2025 年も consensus document 3 編、review paper 2 編を出版致しました。皆様の引用によって CVIT 誌のインパクトファクターは上昇しますので、皆様が引用しやすい consensus document、Review paper を創出したり、2 年ごとの更新を行ったりして参ります。

3，「医師の働き方改革」に関して情報発信を続け、タスク・シフト/シェアに関して日本臨床衛生検査技師会、日本臨床工学技士会と一緒に行政、関連団体、政治家との交渉を継続しています。同時に教育プログラムの充実を図ることを目的として、清潔介助ハンズオン実習を始めました。今後、メディカルスタッフを対象としたハンズオンの機会を増やして参ります。また引き続き厚生労働省や政治家に対し循環器医師減少対策の要望を行い、マスメディアを通じた国民への働きかけ、若手医師の循環器離れを食い止める活動に力を入れていきます。皆様、アンケートへのご協力をよろしくお願い申し上げます。

4，2025 年も多くの新規カテーテル治療デバイスの承認に関わりました。特に EVT 領域は承認ラッシュと言える状態です。新しい分野として治療抵抗性高血圧に対する腎デナベーションの承認が挙げられます。日本高血圧学会、日本循環器学会と一緒に体制を構築しており、2026 年春からは保険診療として治療可能になる予定です。

5，NCD レジストリーから JAHA 2 本など多くのデータ、論文を創出しました。特に J-EVT から 3 本、J-SHD から 2 本など、J-PCI 以外の分野でも実績が出てきたことは大きな収穫と言えるでしょう。

6，CVIT-TV で教育セミナー　8 本、メディカルスタッフ教育セミナー　5 本、企業共催セミナー　11 本を行い、一定の視聴者数を常に数える人気コンテンツとなり、2025 年は CVIT 主催で、会員の皆様にタイムリーな情報発信する企画も専門医認定医制度審議会

（資格申請対策）、国際交流（EAPCI）、CVIT-TV 小委員会（CVIT2025 演題特集）、EVT 治療部門（SWEDEPAD2 を読み解く～パクリタキセル安全性懸念は再燃しているのか？～）など４本行いました。

7，新規の認定医 177 名、専門医 174 名、名誉専門医への移行 24 名を数え、認定医は合計 4,872 名、専門医は 1,846 名、名誉専門医は 333 名となりましたが、更新辞退もあり減少傾向にあります。今後、持続可能な専門医制度のあり方も検討を続けていきます。

8，CVIT2025（志手淳也会長、大阪府立国際会議場、リーガロイヤルホテル大阪）が開催されました。大変活気のある良い大会となりました。2026 年は千葉大学の小林欣夫先生が東京国際フォーラムで行われます。ライブの充実、合併症など治療に難渋したケース、部屋割りなどを特徴的に行い、若手向けの部屋や海外の大御所のレクチャーなど様々な趣向を凝らした規格が考えられています。今年の学術集会も会員の皆さんにぜひ盛り上げていただきたいと思います。なお 2027 年は心臓血管研究所の矢嶋純二先生、2028 年は理事長を退任した後の小生が選出されております。引き続きご協力、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

令和８年元旦

一般社団法人
日本心血管インターベンション治療学会
理事長　　上 妻　謙